

令和4年度第2回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和4年10月21日（金） 午後1時～午後3時

■開催場所：京都市役所本庁舎4階 正庁の間

■議題：

「市民参加推進力」指標による市民参加推進計画の進捗管理について

■報告事項：

- （1）市民参加の裾野拡大の進捗状況について
- （2）市民公募委員サロンの開催結果について
- （3）新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に関係する新しい事業等

■公開・非公開の別：公開

■出席者：市民参加推進フォーラム委員12名

※正庁の間及びオンラインの2会場に分かれて実施した。

正庁の間（対面）：菅谷委員、並木委員、森川委員、森実委員

オンライン：荒木委員、安委員、乾委員、金田委員、篠原委員、長谷川委員、
原田委員、村田委員

■傍聴者：2名

■特記事項：

動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し、後日、音声配信を実施する。
Zoomを用いたWeb会議と併用開催した。

【議事内容】

1 開 会

2 議題 「市民参加推進力」指標による市民参加推進計画の進捗管理について

<森川座長>

・それでは、早速、議題に入る。「市民参加推進力」指標による市民参加推進計画の進捗管理について」事務局から説明をお願いします。

<事務局>

（資料1「市民参加推進力」指標による市民参加推進計画の進捗管理について」、
資料2「ロジックモデルを活用した第3期市民参加推進計画の進捗管理の方法について」
説明）

正庁の間（対面）

<森実委員>

- ・ 資料２の左端にある事業及び結果とアウトカムを教えてください。

<事務局>

- ・ 施策は事業の集合体であり、例えば資料２の「施策２」で、括弧書き数字の１行下に事業名を掲載している。事業を推進した結果が、その右側のアウトプットである。事業が事業対象に及ぼした変化がアウトカムである。（１）だと、パブリック・コメントの実施結果が実施回数となる。これがアウトプットである。パブリック・コメントを実施することで市政参加の成果として出るのがパブコメへの意見数で、アウトカムである。パブコメへの意見数が増えていけば市政参加が進んでいると評価できる。
- ・ 施策２，３，５の推進した成果が重視する視点１の中期アウトカムの向上につながり、３つの重視する視点が進めることで、市民参加推進力が向上し、長期アウトカム「目指す姿」の実現につながる。

<並木委員>

- ・ 資料２は市民参加推進計画とロジックモデルの関係性について、全体像をつかむための資料という作りになっている。

<森実委員>

- ・ パブコメの意見数は増えたら良さそうにも思えるが、指標は増えたらよいとされるのか。

<事務局>

- ・ 指標によるので一概に増えたらよいとは言えない。指標ごとに検討することとなると考える。

<並木委員>

- ・ 今回の計画の評価では、個別政策の実施状況をアウトプット指標で評価するプロセス評価と、政策の成果をアウトカム指標で評価するアウトカム・インパクト評価がありえる。

<森川座長>

- ・ アウトカムの長期や中期の期間はどのくらいを想定しているのか。

<事務局>

- ・ 長期アウトカムで記載している目指す未来像の内容は第2期計画と同じものである。そのため、10年や20年の長期間で目指していくものとする。中期は計画の期間内5年や10年程度で目指していくものとする。
- ・ 短期は事業の積重ねであるため、1年程度で進捗を測りたいとする。

<菅谷委員>

- ・ 今回行う評価ではプロセスを評価していくものか、結果を評価していくのかを決めておくべき。
- ・ また、パブコメの実施回数が高まると市民に関心が高い案件が場合にその年だけ意見数が増える。評価するものさしをどのようなものにするか工夫がいる。ただ、単純にこれが増えたからよくなったという指標をつくることは難しいかもしれない。

<森実委員>

- ・ アウトプットやアウトカムなど、難しい言葉が並んでいるので具体的にやってみないとなかなかイメージがわきにくいように思われる。やってみてわかることもある。

<並木委員>

- ・ 市民実感調査でどういった変化があるかを確認する際、中期アウトカムの指標の検討時に市民とワークショップをして検討することもできる。フォーラム委員には公募委員も多い。施策2のようにフォーラムの場で評価できる施策もある。

<森川座長>

- ・ ステークホルダーを巻き込みながら評価を行うという説明があったと記憶している。フォーラム委員がステークホルダーと言える施策はその方法で可能である。

<並木委員>

- ・ ステークホルダーの巻き込みは労力との兼ね合いがある。市民参加は京都市のすべての政策分野にまたがり対象者は広すぎる。区役所で実務に関わる職員と活動を実際やっている人を呼んでみるのも一つの手である。

<森川座長>

- ・ 毎年分析を行い、その結果を積み重ねていくことで計画の評価とするのか。

<並木委員>

- ・ 施策の成果が1年でどう変化したかをみることもできる。どれくらい変化したかを数値指標で見れるとよい。
- ・ 防災訓練を例にとると、定期的に防災訓練を行っていたとして、それらが計画どおりに実施されたにも関わらず、アンケートをとると防災意識が高まっていないとの結果が出たとする。その場合、訓練は地域の助け合い意識を向上させるためにするものなので、従前の訓練内容を工夫する必要があることが、評価結果から判明する。短期的な取組の改善にもつなげられる。

<森川座長>

- ・ 既存の数値指標がないアウトカムもあると思う。その場合、継続的に市民実感を測っているアンケート調査があるとよい。市民実感の評価の要素として必要である。

<並木委員>

- ・ 新規だと予算が必要となるので、既存調査の指標が使えるとよい。調査をしなければ分からないところがあるので、ネットアンケートなど低価格でできるものが活用できれば。

<菅谷委員>

- ・ 市民参加が盛り上がっているかを測る質問があればよいのだが、どういう質問にするかは難しい。

<森川座長>

- ・ 都市計画規制の緩和の案件はちょうどよい。意見が多くなりそうだ。

<森実委員>

- ・ 意識調査以外もあった方がよい。それも活用するのがロジックモデル。

<森川座長>

- ・ 第4回で施策を1、2個抜き出して試行する。たたき台をつくってフォーラムで意見交換を行う。

<森実委員>

- ・ 3つの重視する視点ごとに一つずつ施策を抽出する方法でもよい。

<森川座長>

- ・ 横軸の話があるので、他の施策も含めて評価する。

オンライン

<乾副座長>

- ・ 本日は、指標設計の方針を決めるため、理解を深めていただきたい。事務局の説明で、ご不明な点はあるか。

<荒木委員>

- ・ このアウトカムは、今後どのように使われるのか。公表される予定やその時期等が知りたい。

<事務局>

- ・ 今後の使い方を含めて検討していきたい。昨年度の議論では、公表する予定にはしていなかったが、担当部署への結果のフィードバックや、優れた取組の全庁への共有を通じて、市民参加推進の取組を横に広げていくイメージである。

<金田委員>

- ・ 中期アウトカムの件で聞きたい。市民生活実感調査を活用するということだが、学び・信頼をはぐくむ対話と結びつきそうか。また、活用するのが既に取りられている調査なのか、これから取る調査なのか、基本的なことを知りたい。

<事務局>

- ・ 市民生活実感調査が使えるような項目については、活用していきたい。既にある調査を活用していくイメージであるが、調査の項目には各施策に親和性のあるものとそうでないものが入り混じっているため、精査しているところである。

<金田委員>

- ・ 既に取りっている調査で、重なる部分であれば上手く使えると良い。バランス良く取り扱えれば良いと思う。

<安委員>

- ・ 進捗管理の結果について、1年に1回振り返りのような形で毎年実施していくのか。
- ・ どのような指標で測るかは、これから施策ごとにチョイスしていくのか。

<事務局>

- ・ そのイメージである。今年度の第4回会議で、実際に試行的に進捗管理をする施策の指標をお示しする予定である。その後、資料7に記載しているとおり、年度ごとに6施策ずつの進捗を見ていく予定である。

<乾副座長>

- ・ これまで、計画を策定する際、市民公募委員を含めた様々な委員が意見を出し合って目標や施策等を決めてきたが、その到達度の確認はあまりされていなかった。本来は、計画を作る人が、その計画を評価するための指標もセットでつくる必要があるのではないかというのが、今回の指標検討の発想に至った経過である。
- ・ 進捗の測り方は、アウトプットとアウトカムである。アウトプットは政策したことによって得た単純な成果で、アウトカムは、それを実施したことによる「状態」を把握するものである。
- ・ 本フォーラムとしては、政策効果を測る重要性を広めていかないといけないし、計画と評価指標を一緒に作る重要性を認識しないといけない。

<原田委員>

- ・ このロジックモデルは何に使われるのか。例えば、施策を考案する際に使われるのか。

<乾副座長>

- ・ 計画あるいは施策が上手く進んでいるかを確認する道具として、ロジックモデルを活用する。市民参加推進計画でいうと、13の施策をこのロジックモデルで評価すると進捗が分かるのではないかと、ということを作っていきたい。

<原田委員>

- ・ 中期アウトカムの重視する視点について、定性目標であるとしても、抽象度が高いと思う。重視する視点が、短期アウトカムの指標の項目につながると思うが、どのようにでも捉えられてしまうのではないかと。

<乾副座長>

- ・ 抽象度は高いものにならざるを得ないと思う。
- ・ ただ、アウトプットは具体的な数値で表すことができる。アウトプットは、アンケートやインタビューから具体的に数値を取ることができる。これらを組み合わせることで、その「状態」になっているか判断する。
- ・ これらの項目の取り揃え方について、皆さんの合意を得ることができれば、指標として設定していくイメージである。

<原田委員>

- ・ 逆に言えば、抽象度が高いことで、クリティカルでない施策も入れられるということか。

<乾副座長>

- ・ 例えば、幸福度ランキングの測り方は、様々な指標を組み合わせでランキングを決めているわけである。その指標の組み合わせが変われば、ランキングも変わるが、どの指標が適切かということをみんなで議論して決めている。この際の「幸福度」も抽象度が高いものである。
- ・ 長期目標は、最終的には「ウェルビーイング」的なことであると思う。しかし、これはいつか到達したいもので、あまりにも遠い目標になるため、それを分解して、3年後・10年度の状態の目標を作っていきたいものである。

<原田委員>

- ・ 指標は良いと思うが、中期アウトカムに掲げている「重視する視点」の言葉の定義がないため、何を目指しているのかイメージが難しい。

<乾副座長>

- ・ それは重要である。計画を作った委員と進捗管理をする新たな委員がいる。それぞれの考え方をすり合わせていく必要はあると思う。

<篠原委員>

- ・ 乾副座長の考え方と似ている。これから1つ1つの施策に対する指標を作っていく中で、解像度の高さも含めて決めていくため、「重視する視点」は敢えて抽象的で問題ないと思う。

<事務局>

- ・ 市民参加推進計画の中に、「重視する視点」について、もう少し詳しく書かれてる部分がある。またご覧いただきたい。

<乾副座長>

- ・ 13施策の指標を一気に進めるとパンクしてしまう。できる施策から順番に作っていくと理想的である。

<篠原副座長>

- ・ 今回の計画については、定量的な指標だけでは良くないと思う。施策と具体的な事業に合わせて、丁寧にトライ・アンド・エラーで指標を検討していくことで、ロジックモデルを使って進捗管理をするまでのパターンを作ることができれば、他の施策にもパターンを当てはめやすいと思う。

<村田委員>

- ・ 本日は、遅れての参加になったが、資料に目を通して不明な点があれば、また質問させていただく。

<長谷川委員>

- ・ 指標の検討について、進め方の時間軸も含め承知した。

3 報告事項

報告事項（１）市民参加の裾野拡大の進捗状況について

<事務局>

（資料３「市民参加の裾野拡大の進捗状況について」報告）

正庁の間（対面）

<森川座長>

- ・ 探究の授業はまちづくりと親和性が高く、公共の授業は市政参加と親和性が高い。

<菅谷委員>

- ・ 洛南高校の出前トークの対象者の詳細は。

<事務局>

- ・ 今回は９０名の高校１年生に対して市政参加の話をした。学年全員ではないので、依頼をされた先生の判断でクラスを選ばれたと思われる。

オンライン

<乾副座長>

- ・ 京都奏和高等学校は、市立の新しい学校で、まちづくり１００人委員会にも参加していた教員が、探究学習の一環で「ビジテック」の授業に熱心に取り組んでいる。自分の関心に基づいて、様々な課題に自分ごとで取り組むことによって、自分のキャリアを考えていっているところであると思う。タイアップして、まちづくりに関わる高校生の裾野拡大を進められたらと思う。
- ・ また、「公共」という新しい科目での連携も進めていく。こちらは、市政参加やシチズンシップの裾野拡大になるかと思う。
- ・ ちょうど良いタイミングで連携ができているのではないかと思う。何かご質問等あるか。

<篠原副座長>

- ・ 10月17日に京都奏和高等学校に打ち合わせに行ってきた。市民参加推進フォーラムとしてではなく、「場づくり」の仕事として依頼を受けているものである。
- ・ 仕事としても、市民参加推進フォーラムの委員としても取り組むことができ、ちょうど良いと考えている。
- ・ 令和5年度に3年生になる生徒たちが、自分の課題意識をプロジェクト化して取り組む。どのようなテーマのプロジェクトが出てくるかまだ分からないが、きっとフォーラム委員等、大人達のつながりの力が必要となるため、そこで関わっていければよいと思う。どのような取組が生まれるか分からないため、関わり具合もその時に応じて柔軟に対応したい。

<乾副座長>

- ・ 困りのある子どもたちこそ、社会との関わりが必要になってくる。困ったときに助けを求めたり、社会の中で自分が活躍することで存在価値を確認するなど、社会との関わり方を学ぶ必要があると、キャリア教育やシチズンシップ教育を行っている立場としては感じる。

<篠原副座長>

- ・ 創立2年目の高校で、先生方の熱意も高い。子どもたちも2年間過ごす中で良い距離感や自分の得意・不得意が分かってきた段階である。3年生になり、今後、社会に出るという時期にどういう風に世の中と関わっていくか学ぶことは重要であると思う。先生もそのように願っておられるので、支援ができるように関わっていきたい。

<原田委員>

- ・ 高校生への裾野拡大は、どのような経過・目的で実施することになったのか。

<安委員>

- ・ 昨年度、裾野拡大の部会に所属していた。「市民参加の裾野拡大」という言葉自体は、第3期市民参加推進計画の中に掲げられている。まず、どのような人に市民参加を促すかという議論の中で、これから大人になっていく高校生に地域とのつながりを作り、市民参加のきっかけにしてもらう必要があると考えたため、高校生を対象にすることが決まった。

<原田委員>

- ・ 昨年度に決まった施策ということか。

<安委員>

- ・ その通りである。ちょうど「公共」の授業が始まることもあり、高校と密接に関わりながら取り組むことができるのではないかという結論になった。

<事務局>

- ・ これまでも大学生を対象とした取組は実施してきたが、それでは遅いのではないかとのご意見が多かったことがきっかけである。
- ・ 今後、高校や教育委員会と打ち合わせ等を行う際には、フォーラム委員の皆様にもぜひ参加していただきたい。

報告事項（２）市民公募委員サロンの開催結果について

<事務局>

（資料４「市民公募委員サロンの開催結果について」報告）

正庁の間（対面）

<森川座長>

- ・ 身近な課題に対する意識から委員になられた方がいた印象である。会議では発言しにくいという意識がやわらげられたらと思う。

<並木委員>

- ・ 発言しにくい雰囲気であっても発言できるように、議長が工夫して発言を促せるとよい。

<森川座長>

- ・ 参加の満足度は高かったと思える。審議会だと意見が言いにくい、専門家が多いので話しにくい、と思われるので、議長や委員長が話しやすくする進行を行い、話の振り方が大事である。
- ・ 終了後に運営側で話をした際の意見として、今回の参加者数１２名は多くない、情報の届け方に課題があるなどの意見があった。

<森実委員>

- ・ 開催の時間帯等により参加しやすい人、しにくい人が出てくる。参加の在り方、公募委員の裾野の拡大のための工夫が必要である。

<菅谷委員>

- ・ 公募委員がいる審議会が１００ほどある中で、１，２名の公募委員がそれぞれいるなら、１２名は少ないと感じる。

<森川座長>

- ・ 参加の後押しが必要である。サロンにきてくれたらよい。サロンに出ることにより公募委員の方々は勇気がもらえる。

<森実委員>

- ・ 資料のグラフィックもよい。

<菅谷委員>

- ・ 審議会が立ち上がる際に公募委員の方々に丁寧なレクチャーができるとよい。公募委員の方々にとって心の準備ができる。

<山崎部長>

- ・ 新たに公募委員となられた方々全員、100名規模に丁寧なレクチャーをすることは現実的に難しい。サロンをやってきて得られた知見などをメッセージとして伝えるなど、良い工夫策が見つかればそれをどんどんやっていくことができればいいのでは。
- ・ 取組の意義は理解されるが呼び掛けても来ない人がいる。その人たちにどうアプローチするか、そこを考えることも必要。

<森川座長>

- ・ 知見が各部署で共有できたらよい。最小限の工夫があれば、各審議会の議長がやってもらえるような工夫があるとよい。

<山崎部長>

- ・ 審議会も様々あり、専門性の高いものからそうでないものまであり、いちがいに議長にしてもらうことが難しい審議会もあるのではないかな。様々な工夫がいると考える。

オンライン

<原田委員>

- ・ 運営の立場として関わった。ファシリテーターの役割を担っていたフォーラム委員が、緊張をほぐしながら多くの意見を引き出していた。附属機関によっては、発言できる雰囲気を作られていないという話もあり、全体でそれを共有できたのが良かった。参加者も勇気をもって帰られたと思う。

<安委員>

- ・ グラフィックレコーディングがあることで、サロンだよりもとても親近感の湧くような内容になって良いと思った。

- ・ 今までよりも女性の参加者が多かったこともあるかもしれないが、もっと話したいような人が多かった。市民公募委員の仕組みを改善できるようなアイデアを持っている人が多く、参加人数は少なかったが、市民公募委員の存在を広めて、応募する方を増やす一歩になったと思う。

<乾副座長>

- ・ 公募委員サロンの参加者が少なくなってきた中で、昨年度まで2回実施していたのを今年度は1回にした。今後、どのように市民公募委員をフォローするかというあり方については、今後のフォーラム会議で検討してもよいかもしれない。

<篠原副座長>

- ・ 白水委員のグラフィックレコーディングが、参加しなかった人にも伝わりやすく、とても良いと思う。今までよりも話す時間を長めにとったことも良かった。話す時間をより長くしたり、附属機関の事務局である市職員に参加してもらおう等、次回に向けてさらに工夫できるのではないかな。

<荒木委員>

- ・ 市民公募委員の発言のしづらは、その会議を進行する人による影響が大きい。市民公募委員がどのような状況で会議に参加できているかや、パブコメの実質的な活用状況を「市民参加推進力」指標に入れても良いのではないかなと思った。市民公募委員制度やパブコメ制度は、市民参加の根本であると思うので、検討してみてもよいのではないかな。

<乾副座長>

- ・ まさに、ロジックモデルでそれを記述できるはずである。

<荒木委員>

- ・ 行政目線で考えると、市民参加の推進にあたって、この2つの制度は本丸と言えるように思う。

<乾副座長>

- ・ そもそも市民公募委員に関しては、応募者が少なく、直接市民に依頼して応募してもらっている附属機関もあるのが現状である。

<荒木委員>

- ・ 応募が少ないのが、マーケティング的な問題なのか、附属機関の扱う内容的な問題なのか、検討すると面白いのではないかなを感じる。

<乾副座長>

- ・ 今後、大きな論点の1つにしてもよいかもしれない。

報告事項（3）新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に関する新しい事業等

<事務局>

（資料5「新たに設置された附属機関等に係る「附属機関等の設置・開催等に関する協議書」について」、資料6「市民参加に関する新しい事業や取組」報告）

正庁の間（対面）

<森実委員>

- ・ 2つ目の委員会が非公開で他の2つが一部非公開になっている理由が分からない。

<事務局>

- ・ 2つ目は京都市情報公開条例第7条第2号だけでなく、第5号にも該当している。

<森川座長>

- ・ 現在、都市計画の規制緩和のパブリック・コメントが行われているが、その会議の2回目から5回目が非公開となった。途中で運用が変わったのか。

<山崎部長>

- ・ 非公開としている理由について、個別に確認して次回審議会で報告させていただく。

オンライン

<乾副座長>

- ・ 「WE LOVE KYOTO」については、昨年度も情報をもらったと思う。今年度も、フォーラム委員にはメールで周知されていた。

<安委員>

- ・ 昨年度、参加した。ファシリテーターの存在をあまり知らなかったが、市職員とも対等に意見交換ができる機会で、楽しく参加できた。

<乾副座長>

- ・ このような企画は、これから市民公募委員を目指す学生がもっと参加すれば良いと思う。ただ、あまり知られていない。大学でも力を入れているため、キャリアセンター等に情報を回していけばよいと思う。

<事務局>

- ・ 現在、大学コンソーシアムのメーリングリストと大学生向けアプリ「KYO-DENT」で周知している。

<村田委員>

- ・ この企画は、京都市民が参加できるものか。大学の授業で案内できればと思っている。

<事務局>

- ・ 京都市外に住んでいる方でも参加可能である。ぜひ周知していただけるとありがたい。

<乾副座長>

- ・ 各大学の公務員支援をやっているような窓口に直接周知すれば、効果が大きいと思う。

<原田委員>

- ・ 民間に広報の協力をお願いしてもよいかもしれない。先日、社会課題に興味がある子が200名くらい集まるイベントがあった。そのような機会に周知してはどうか。

<荒木委員>

- ・ 民間の関連イベントを事前に調べておき、直接、広報依頼をするのは効果的である。

その他 傍聴者からの意見

<傍聴者1>

- ・ 以前に一度このフォーラムにお邪魔させてもらった。市民参加に興味があり、理解したいと考えている。本日は評価の話があったが、どこを目指そうとしているのかが見えない。具体的なものが見えてこない。市民参加には動機付けが重要と考える。参加したくなるようもっていかないといけない。工夫が必要である。そのあたりをフォーラムで考えてほしい。

<傍聴者2>

- ・ アンケートに書かせていただいた。座長に渡させていただく。

4 閉会

<事務局>

第3回会議は令和5年1月頃に実施予定である。本日はありがとうございました。

以上